

特別養護老人ホームに入所している認知症者の 行動・心理症状（BPSD）の行動分析学的理解

—その行動がなぜ生起するのかを考察する—

Understanding Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia (BPSD) based on Behavior Analysis

○崔鉉宜¹, 渡辺修宏²

CUI XUANYI, Watanabe Nobuhiro

国際医療福祉大学医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科 介護福祉コース¹, 国際医療福祉大学²

International University of Health and Welfare

Key words: BPSD, Dementia(認知症), Behavior Analysis(行動分析学)

目的

WHO（世界保健機関）によると、世界における現在の認知症有病者数は約5500万人、そして毎年300万人近くが新たに認知症になるという（WHO, 2021）。我が国を含め世界全体において、これまで以上に認知症と向き合う必要が高まっているといえる。認知症は主に、中核症状（記憶障害、見当識障害、言語障害、実行機能障害、失行、失認等）と周辺症状に分けられる。中核症状は、その症状に大小はあっても、ある意味、認知症者はほぼ全員に似たような症状がみられるため、比較的、対応方法も絞りやすい。しかし周辺症状、すなわち、「認知症者にみられる行動・心理症状（Behavioral and Psychological Symptom of Dementia. 以下、BPSD）」は、その者がこれまで培ってきた個人的な考え方（思想）や生活歴、さらには文化や宗教などの影響により、症状における個人差が比較的大きくなりやすい。そのため、BPSDの機序を医学的・生理学的な視点から捉えるだけでは、対応が不十分になることが少なくない。また、BPSDの軽症期では介護者への負担は比較的軽いものの、進行とともに介護者や周辺の人々の精神的負担と肉体的負担は大きくなる。その負担増が、不適切なケアや虐待を招く可能性もある。したがって、BPSDを多面的に捉え、効果的な対応策を探る必要がある。

そのような中、我が国では1990年代以降、要介護高齢者の被害妄想に関する不適応行動への、行動分析学に基づく実践などが紹介されはじめている（三原, 1991）。行動分析学は、理論的かつ技術的に、ある行動の生起、増大、低減、消失の過程を明らかにする。介護場面におけるBPSDもまた、つまるところは認知症者の行動と、それへの対応という（介護者の）行動で構成されるため、行動分析学はまさにこの問題に有用に対応するかもしれない。事実、医療施設や介護場面におけるその実践論文のほとんどにおいて、不適応行動の改善が報告されており、介入の有効性は高いものと考えられる。したがって、介護現場での認知症者へ対応する場面で、行動分析学に基づく実践が可能であるならば、より効果的な介護を行うことができ、問題行動によ

る介護職の負担軽減や、認知症者のQOLの向上も図れるかもしれない。

しかし、未だ行動分析学は、要介護高齢者の不適応行動を改善する方法論として一般的とはいえない現状にある（宮, 2015）。BPSDへの対応において行動分析学が科学的にも実用的にも、そして利用者にも援助者にとっても真に有用であるならば、その具体的内容を明らかにするべきであろうし、またその知識と技術に基づく援助方略は普及すべきであろう。そこで本研究は、認知症者のBPSDの機序を、行動分析学の理論と技術に基づいて考察し、介護者が持つべき援助方略について検討する。すなわち、認知機能と身体機能の低下以外の要因から、BPSDについての理解と対応を深めることを模索することが、本研究の目的となる。

方法

本研究は、認知症者が示すBPSDがどのように起こっているのか、またそれがどのように維持されているのか、そして、それをどのように解決すればよいのかについて、具体的な介護場面で検討を行うこととする。具体的には、23日間に渡って第1筆者が地域密着型特別養護老人ホームXにおいて見聞きした、BPSDを思われる介護場面（利用者2名）を例に、ABC分析によって検討を行った。

結果と考察

結果、次の2つの事例における計4種類のBPSDが整理、検討された。すなわち、80代の女性、アルツハイマー型認知症、統合失調症を患っていた要介護度4の利用者Aによる、1）リビングにおける立ち上がり行動、2）コップ等投げ飛ばし問題、3）他者の飲み物一気飲み行動であった。そして最後が、80代女性、アルツハイマー型認知症、脳梗塞による左半身不全麻痺、うつ血性心不全がある女性Bによる、4）夜間における離床行動であった。

ABC分析によって、認知症者の心理的内面への注目だけに偏ることなく、むしろ徹底して環境条件操作を行うという、従来の介護方法ではあまり考慮されない視点と方法が浮き彫りとなった。このような援助方略は、至極具体的かつ合理的な対応を見出しやすいと考えられた。